

# 杳たる月 〈初演版〉

作 新井孔央（ド・パールシム）

《登場人物》

山城アオ（25）：この家に住む男

山城キョウカ（24）：アオの義理の妹

坂口テツヤ（28）：アオの従兄弟。一昨日前から山城家に滞在。

赤木タクミ（25）：アオの同僚

太田ユキ（24）：アオの同僚であり恋人

斉藤ケイタ（26）：キョウカの婚約者

鳥島サヤ（22）：山城家の隣の娘

《舞台》

山城家の一階にあるリビング。田舎の家屋である。畳の床。中央に大きな掘りゴタツ。舞台奥には引き戸があり、それは廊下や玄関につながっている。また上手側にも引き戸がある。それは台所につながっている。舞台上手奥には大きな柵のようなものがある。舞台下手前にテレビがある。

《本文》

〈一場〉午前1時

客入れの音楽がいつの間にか消え、暗転する。風の音。フクロウの鳴き声。

女性の鼻歌が聞こえる。宇多田ヒカルの「First Love」のイントロだ。

キョウカ 「・・・最後のキスはタバコのフレーバーがした・・・」

明転。

舞台下手奥には少し大きめの古いゆりかごがある。中は見えない。その横に部屋着の山城キョウカが立っている。

キョウカ 「明日の今頃にはーあなたはどこにいるんだろう・・・」

山城アオが入ってくる。ガムテープと3冊の週刊少年ジャンプを持っている。

キョウカ 「誰を思ってるんだろー・・・you are always gonna be my love ♪

つか・・・」

アオ (ドンツと大きな音を立ててこたつにジャンプを置く)

キョウカ (ビクツとして、歌うのをやめる)

間

キョウカ 「びっくりした・・・」

間

アオ 「・・・グレルぞ」

キョウカ 「え？」

アオ 「そいつ」

キョウカ 「グレル？」

アオ 「おお」

キョウカ 「グレル・・・うん」

アオはジャンプをガムテープで繋げて腹巻きのようなものを作り出した。

キヨウカ 「え、なんで？」

アオ 「だって、失恋ソングだろそれ」

キヨウカ 「ああ、え、ファーストラブ」

アオ 「おう」

キヨウカ 「宇多田ヒカルの」

アオ 「うん」

キヨウカ 「ああ、え、宇多田ヒカルはグレルの？なんで？」

アオ 「そうじゃなくて、いや別に宇多田ヒカルは悪くねえよ」

キヨウカ 「え、意味わかんない」

アオ 「いやだから、生まれた瞬間から失恋ソング聴かされるんだよ？」

キヨウカ 「うん」

アオ 「なんか嫌だろ」

キヨウカ 「そう？」

アオ 「おう、幸先悪いだろ。人生の」

キヨウカ 「そうかな」

アオ 「うん、悪いよ、幸先・・・人生・・・」

キヨウカ 「・・・幸先（笑）」

間

アオ 「母さんは？」

キヨウカ 「もう寝てる」

アオ 「そりゃそうか」

キヨウカ 「だってもう・・・」（ポケットのスマホを見ようとするが充電が切れている。充電を差しに行く）

アオ 「え」

キヨウカ 「・・・」

アオ （自分のスマホで時間を確認しようとするが、こちらも充電が切れている。少し迷ったあと、充電を差しに行き、キヨウカのスマホを外し、自分のを差す）

キヨウカ （無言で見つめる）「・・・」

間

アオ 「今日起きた？」

キヨウカ 「え？」

アオ 「母さん」

キヨウカ 「私は見えてないけど」

アオ 「ああ、じゃあ起きてないな」

キヨウカ 「なんで？」

アオ 「だって、俺も見てねえから」

キヨウカ 「・・・あ、でもチャーハン。お昼サツキさんの部屋の前に置いた  
んだけどさ」

アオ 「チャーハン？」

キヨウカ 「エビチャーハン。お兄ちゃんも食べたでしょう？お昼」

アオ 「うん」

キヨウカ 「それなくなってたから」

アオ 「あっそう」

キヨウカ 「だから、その、生きてることは生きてるよ？」

アオ 「誰も死んだと思ってねえよ（笑）」

間

アオ 「ほんと、どっちかにしてほしいよ・・・」（台所へ消える）

キヨウカは充電器からアオのスマホを外して自分のスマホを差す。アオが台所  
から現れる。手には包丁。

キヨウカ 「あ・・・」

アオ （無言で充電器を眺める）

キヨウカ 「・・・でもテッちゃん来たから」

アオ 「は？」

キヨウカ 「あ、いや、どっちかにしてほしいって言ってたから」

アオ 「ああ」

キヨウカ 「ばあちゃんの方はだから、大丈夫なんじゃない？」

アオ 「どうなんかね・・・」

キヨウカ 「え？」

アオ 「介護っていつでもバイトだろ？なんかそうゆう免許持ってるわけ  
じゃないみたいじゃない」

キヨウカ 「うん」

アオ 「うーん、なんか信用できないんだよな・・・」

キョウカ 「え、でも経験者ってだけで心強いじゃ・・・」

アオ (遮って) 「や、金だろ」

キョウカ 「はい？」

アオ 「多分、金だな、あれ」

キョウカ 「・・・」

アオ 「昔から好きじゃないんだよな、あいつ」

キョウカ 「いやでも」

アオ (遮って) 「いやキョウカはさ、好かれてるから」(包丁をジャンプに挟み込む)

間

アオ 「・・・頭痛え。寒いし・・・」

間

キョウカ 「・・・畳の部屋に運び込んだの？」

アオ 「え？ああ、うん」

キョウカ 「他の人は？」

アオ 「他？」

キョウカ 「タクミくんとか」

アオ 「あいつはブルーシートをね、探し行った」

キョウカ 「ああ、そう」(と言いながら、アオの背後にくる)

アオ 「何？」

キョウカ 「ハグしようと思って」

アオ 「やめろよ(笑)」

キョウカ 「なんで？」(ハグをする)

アオ 「え、いや、だって」(扉の方を気にする)

キョウカ 「・・・ユキちゃんは？」

アオ 「一回家。あいつも泊まるからさ、今日」

キョウカ 「ああ、そう」

アオ 「流石にね、あいつも泊まるってさ。なんかあなたたちだけに責任を負わせられないとか言って(笑)でも女の子って色々あるって、だからそうゆうの・・・」

キョウカ (遮るようにキスする)

アオ 「・・・やめろって(笑)」

キョウカ 「なんで？」

アオ 「今は違うでしょ」  
キョウカ 「なんで？」  
アオ 「・・・なんでって、勃つかから？（笑）」  
キョウカ 「勃つんだ・・・（笑）」（股間を触る）  
アオ （その手を掴んで、キョウカを抱きしめる）  
キョウカ （抱きしめかえす）

坂口テツヤが奥の引き戸を開けて現れる。2人は急いで離れる。

テツヤ 「あ」  
キョウカ （平然を装い）「・・・あ、テツちゃん。どうかしたの？」  
テツヤ 「いや、どうってわけじゃないんだけど」  
キョウカ 「うん」  
テツヤ 「ばあちゃん」  
アオ 「なに？」  
テツヤ 「いや、ばあちゃんさ、寝てるんだよね？」  
アオ 「うん、寝てるけど」  
テツヤ 「うん、だよね」  
アオ 「え、なに？」  
テツヤ 「や、なんか音がしなくてね」  
アオ 「音？」  
テツヤ 「や、別になんか、そんなアレじゃないんだけど」  
アオ 「アレ？」  
テツヤ 「いやなんか、ちょっと怖いというか・・・」  
アオ 「はあ・・・」  
テツヤ 「うん、いや別にね、いいんだけど」  
キョウカ （遮って）「・・・え、それはだからつまり、死んでるかもしれないってこと？」  
テツヤ 「は」  
キョウカ 「怖いっていうのは」  
アオ 「ちょっと」  
テツヤ 「・・・いや、どうだろ？その確かにね、死んでるとは思ってないけど。でもその恐怖の根源。根源って言うと言い方はアレかもしれない

ないけど、やっぱり死んでるってところから来るのかもしれないけど・・・」

間

アオ 「・・・よくわかんねえな」

テツヤ 「だからそれだけで、別に平気なんだけど・・・」

間

テツヤ 「サツキさんはいつからあんな感じ？」

アオ 「いいよ、気にしなくて」

テツヤ 「だいぶゲツソリしてたから」

アオ 「え、母さん見たの？」

テツヤ 「うん」

アオ 「ああ・・・」

テツヤ 「なんか様子が変でさ、挨拶したけど無視されたから」

キョウカ 「・・・半年くらい前から」

テツヤ 「半年？」

アオ 「キョウカいいよ」

テツヤ 「ああ、それはやっぱり・・・」

キョウカ 「うん、私のお父さんが出てっちゃったから」

テツヤ 「ああ」

アオ 「キョウカ」

キョウカ 「私のお父さんが浮気して出てっちゃったからだよ」

アオ 「いいって！」

間

テツヤ 「・・・なんかごめん」

アオ 「（頭を搔いて）「・・・ほっとけよ」

赤木タクミが入ってくる。大きくて汚いブルーシートを持っている。

テツヤ 「どうも」

タクミ 「あ、どうも」

間

アオ 「まあ、だからとりあえず、テキトーに面倒みてくれればいいから、ばあちゃんは」

テツヤ 「ああ・・・」

アオ 「や、だってなんか、技が使えるわけじゃないでしょ」

テツヤ 「いや技って・・・(笑)」

間

テツヤ (ゆりかごに目を向けて) 「寝てるわ・・・」

アオ 「うん」

テツヤ 「人形みたい」

キョウカ 「可愛いでしょう」

テツヤ 「うん」

キョウカ (変に強調して) 「私の子だから」

テツヤ 「ああ・・・うん、そうね(笑)」

間

テツヤ 「じゃあ戻るわ」

キョウカ 「うん」

テツヤ 「おやすみ」

キョウカ 「おやすみなさい」

テツヤ 「あ、なんか月、満月。すごい綺麗だったから、見るといいよ」

キョウカ 「そう」

テツヤ 「うん、おやすみ」

キョウカ 「おやすみ」

テツヤは出て行く。沈黙の時間が流れる。フクロウの鳴き声。沈黙を切り裂くようにキョウカのスマホの電話が鳴る。キョウカは相手の名前をみると、スマホを充電器から外し、台所へ。

アオ (自分のスマホを充電器に差しながら) 「いとこなの」

タクミ 「ああ」

アオ 「付き合ってたんだよ昔」

タクミ 「え、誰が？」

アオ (台所を指さす)

タクミ 「ああ・・・え？」

アオ 「まあキョウカとは別に血繋がってるわけじゃないから」

タクミ 「そっか(笑)」

アオ 「気持ち悪いけど・・・(笑)」

タクミ 「いつ来たの？」

アオ 「一昨日かな。(上を指さして) あの、介護介護。ばあちゃんの」

タクミ 「あーそうゆうこと」

アオ 「なんかね、アレだよ。俳優でさ、あの顔で」

タクミ 「うん」

アオ 「ずっと、老人ホームでバイトしてたんだって。東京の」

タクミ 「おお、シテイボーイだ(笑)」

アオ 「そんな顔じゃないけどな」(言いながら、廊下に消える)

取り残されたタクミ。ブルーシートを床に置く。こたつに座る。こたつの上のジャンプに気づき、何気なく包丁を抜き出す。少し驚く。

やがてキョウカが現れる。包丁を持ったタクミに気づき一瞬だけ身構える。タクミは少し慌てて、包丁をジャンプにしまい、謎に両手を上げる。キョウカはアオを少し目で探すがいない。少し微笑みながら、タクミに軽く会釈をして、廊下に消える。

アオが廊下から帰ってくる。

アオ 「曇りだった」

タクミ 「え？」

アオ 「いや、さっきあいつ満月がどうこうって言ってたから」

タクミ 「ああ、言ってたね」

アオ 「おかしいと思って外行ってきたんだけど、曇ってボヤアってた」

タクミ 「そう」

アオ 「まじで、キモいわ。意味わからん」

タクミ 「なにこれ？」

アオ 「え、ジャンプ？」

タクミ 「うん」

アオ 「なんかさ、アレ、防刃の」

タクミ 「ボウジン？」

アオ 「刃を防ぐって書いて防刃」

タクミ 「あー、防刃ね。え、なんで？」

アオ 「なんか、半グレラッパーみたいのがやってるの聞いたことあってさ、万が一のために(笑)」

タクミ 「万が一(笑)」

アオ 「や、なんかさ、あの家、父親以外もキチガイだろ？」

タクミ 「サヤちゃん？」

アオ 「や、違う。兄だよ。鳥島サヤの」

タクミ 「へえ」

アオ 「あそこ信号の角のファミマあるじゃん？床屋の隣の」

タクミ 「うん」

アオ 「あの兄貴さ、なんか前、あそこに停まった自転車一体一体ぶっ倒してた」

タクミ 「うえーやばいね」

アオ 「だろ？やべえんだよ。あとは、俺前、急に殴られたことあるからさ。なんか道歩いてたら、急に後ろから」

タクミ 「えー」

アオ 「でさ、妙に仲良いんだよ、あの兄と父親。しょっちゅう二人で駅前のマルハンの前で並んでるの見かけるもん」

タクミ 「うん」

アオ 「だからその、父親をね、その、俺たちが殺した敵討ち？じゃないけどさ、もし、もしだよ？襲われたときの対策、コレ(笑)」

タクミ 「え、でも、バレては・・・」

アオ 「(遮って)「ないない(笑)」

タクミ 「まあだよ。つーか、あっちが悪いんでしょう？ストーカー」

アオ 「うん。や、彼女がさ、ストーカーされたらさ、うん(笑)」

タクミ 「や、わかるわかる」

アオ 「うん」

タクミ 「ほんと一家で終わってるね、あの家」

アオ 「それ(笑)」

タクミ 「あれ、ユキちゃんは？」

アオ 「ユキは後で来るってさ」

タクミ 「迎え行かないの？」

アオ 「大丈夫だろ、流石に」

タクミ 「まあそうか」

アオ (ジャンプから包丁を出して) 「まあだから万が一」  
タクミ 「うん、そーね」

アオ (包丁を挟み込む)

タクミ 「・・あのさ、セックスって週何回ぐらいするん？」

アオ 「は？」

タクミ 「ユキちゃんと(笑)」

アオ 「は・んー2、3回じゃん？」

タクミ 「何？じゃんって」

アオ 「や、わかんねえけど、2、3回じゃねーの？」

タクミ 「そっか」

アオ 「え、なに？彼女と上手くいってないの？」

タクミ 「いや、そういうことじゃないんだけどね(笑)」

アオ 「ああ」

タクミ 「ただの興味関心だよ(笑)」

アオ 「意味わからん(笑)」

タクミ 「(笑)」

間。フクロウの鳴き声。玄関が空いた音。

アオ 「畳の部屋、行こうぜ」

タクミ 「おう」

アオ 「早めにやっちゃお」

アオはタクミが持ってきたブルーシートを持つ。二人は廊下のドアを開ける。  
そこにはキョウカと斉藤ケイタが立っている。

アオ (少し驚いて) 「・・うす」

ケイタ (軽い会釈)

アオ (タクミに) 「行こーぜ」

タクミ 「うん」

アオとタクミは出て行く。キョウカが先に部屋に入り、そのまま台所に消える。  
ケイタはキョウカに続いて部屋に入ると、すぐにゆりかごを見つけて覗き込む。

キヨウカが手にコップを二つ持っている。キヨウカはゆりかごを覗くケイタの後ろ姿を少し見つめる。

キヨウカ 「ケイちゃん」

ケイタ (振り返らず)「……」

キヨウカ 「冷たいのしかないんだけど、麦茶。いい？」

ケイタ 「……」

キヨウカ (こたつの上にコップを置く)

ケイタ 「……寝てるわ」

キヨウカ 「うん」

ケイタ 「かわいいな」

キヨウカ 「うん」

ケイタ (急にゆりかごに手を入れ、子供持ち上げようとする)

キヨウカ 「ちょっと」

ケイタ (ようやく振り返って)「ん？」

キヨウカ 「なにをするの？」

ケイタ 「や、月をさ、見せてやろうかと思って」

キヨウカ 「月？」

ケイタ 「うん、満月。綺麗だったでしょう？」

キヨウカ 「……」

ケイタ 「いいよね？」

キヨウカ 「あ、え、月、そんなに綺麗だった？」

ケイタ 「は？」

キヨウカ 「や、そんなに綺麗だったかなって」

ケイタ 「え、何その質問」

キヨウカ 「や、暗かった気がしたから、外」

ケイタ 「ええ？ 明るかったよ？」

キヨウカ 「え、明るくはなかった気がするんだけど」

ケイタ 「そんなことないよ」

キヨウカ 「……」

ケイタ 「アレだよ、病院から帰ってきたばっかだからさ、疲れてるんだよ」

キヨウカ 「……うん」

ケイタ 「うん、疲れてる……」

間

ケイタ (ゆりかごの中に向かって)「ケイタっていいですよ」

キヨウカ 「え？」

ケイタ 「初めまして。こんにちは」

キヨウカ 「ケイちゃん？」

ケイタ 「あ、こんばんはか。こんばんは」

キヨウカ 「ねえ？」

ケイタ (キヨウカの方を向いて)「ん？どうしたの？」

キヨウカ 「何してんの？」

ケイタ 「や、挨拶」

キヨウカ 「うん、や、それは・・・」

ケイタ (遮って)「だってさ、父親になるんだから、この子の。そうゆうの  
しつかりしときたいじゃない」

キヨウカ 「・・・」

ケイタ 「うん。なんか決心つかなかったけどさ、うん、やっぱ大丈夫全然。

別に気にしないし」

キヨウカ 「いや・・・」

ケイタ 「かわいいて、いとおしくてちゃんと思ったから、この子のこ  
と」

キヨウカ 「・・・」

ケイタ (もう一度ゆりかごの方向いて)「パパですよ」

キヨウカ 「・・・」

間

ケイタ (なんか少し恥ずかしくなって)「・・・お茶もらうね」

キヨウカ 「うん」

ケイタ (コップを手に取り一口。横のジャンプに目を向ける)「なにこれ？」

キヨウカ (同時に)「あのさ・・・」

間

ケイタ 「ん？」

キヨウカ 「や、いいよ？」

ケイタ 「いいいい。キヨウちゃん先いいよ」

キヨウカ 「え、うん・・・あのさ、ケイちゃん、ほんとにいいの？」

ケイタ 「ん？」

キョウカ 「や、この子育てるって」

ケイタ 「うん。育てるよ」

キョウカ 「とうるか、こうゆうことに対して何も無いの？」

ケイタ 「何もって？」（ジャンプに再び目を向ける）

キョウカ 「・・・怒りとかなんか」

ケイタ 「怒りってそんな・・・え？」（包丁を抜き出し、少し驚く）

ケイタが抜き出したのと同時に、廊下の方の引き戸が開く。アオだ。キョウカとケイタの視線が向く。

アオ （机の上のガムテープを見つけて）「あー、あったあった」

ケイタ 「あ」（持っている包丁に目を向ける）

アオ 「それしまっというってもらって」

ケイタ 「ああ、すいません」（包丁をジャンプに挟む）

アオ 「あ、取ってもらっていいですか？」

ケイタ 「ん？」

アオ 「ガムテープ」

ケイタ 「あ、はい」（取って渡す）

アオ 「ありがとうございます」

ケイタ 「・・・あ、こんな夜遅くに来ちゃって申し訳ないんですけど、どうしても話したいことがあって、ほんと・・・」

アオ 「ああいえ・・・」

間

アオ （出て行こうとするが立ち止まり）「・・・キョウカ」

キョウカ 「なに？」

アオ 「今一瞬いい？」

キョウカ 「え、なに？」

アオ 「一瞬」

キョウカ 「え？」

アオ 「いいから」（キョウカの腕を掴む）

キョウカ 「なに？」

アオ （強く腕を引いて）「いいから一瞬」

キョウカ 「ちよっと」

アオ 「早く！」

キヨウカ 「ちよつとなに！？」

アオ 「いいから来いって！」

ケイタ 「ちよつと」

キヨウカ (同時)「離してって！」

アオ 「なあ！」

キヨウカ 「行くから！」

アオ (暴力的に)「おいって！」

ケイタ 「ちよつと何やってるんですか！」(アオの腕を掴む)

アオ 「うわ、な・・・」

ケイタ 「ちよつと！」(アオの手をキヨウカから離す)

間

アオ (呼吸が荒い)

キヨウカ 「・・・え、なに？」

アオ 「・・・いや」

キヨウカ 「はあ？」

間

アオ 「・・・や、あの、あなた、何しにきたんすか？」

キヨウカ 「え？」

ケイタ (同時に)「え、僕ですか？」

アオ 「ええ」

ケイタ 「あ、あの僕はそのキヨウカさんとお付き合いさせていたでいてい  
る、あの、ものなんですけど」

アオ 「や、それは」

ケイタ 「あの、お兄さん・・・？」

アオ 「ええ」

ケイタ 「あの、初めまして。斉藤ケイタと申します」

アオ 「あ、知ってます」

ケイタ 「ああ・・・え、で、なんですか？」

アオ 「アレですよ？ 婚約者の、キヨウカの」

ケイタ 「あ、ええ、そうです」

アオ 「4ヶ月前からの・・・」

ケイタ 「はい」

アオ 「だから何のためについていうか・・・」(ゆりかごの方に目を向ける)  
ケイタ (それに気づき)「あ、いや大丈夫ですよ」

アオ 「え？」

ケイタ 「あの僕、育てる覚悟あるので」

アオ 「いや、そうゆうことじゃなくて・・・」

引き戸が開いて、タクミがいる。

タクミ 「え、まだ？あ、どうも」

ケイタ 「どうも」

タクミ 「まだ、かかる？」

アオ 「あ、えっと・・・」(キョウカの肩を叩き、タクミの方に行くように促す)

キョウカ 「え、でも」

アオ 「いいから」(ガムテープを手渡す)

キョウカ 「・・・うん」

アオ (タクミに)「キョウカとやってもらっている？」

タクミ 「うん、じゃあ」

タクミとキョウカが出て行く。その後沈黙の間。

ケイタ (沈黙に耐えきれなくなり)「月見ました？」

アオ 「月？」

ケイタ 「満月」

アオ 「え？今日？」

ケイタ 「ええ」

アオ 「今日は曇りでしょう？」

ケイタ 「え、綺麗な満月でしたよ。不気味なくらい」

アオ 「は、いや、でもさっきは曇り・・・」

ケイタ 「僕もさっき見てきて満月だったんですけど」

アオ 「いや・・・」

遮るように、上の方からドンという大きな音。二人とも上を向く。

ケイタ (上を向いているアオに)「・・・あの、結婚を前提にっていうのでね、お付き合ひも始めたんで」

アオ (ケイタの方を向いて)「ええ」

ケイタ 「キョカカさんが3日前に退院してたのは知ってたんですけど、ちよっと仕事が忙しくて中々来れなくて」

アオ 「あれ、何やってるんですしたっけ？」

ケイタ 「お土産屋。駅前の」

アオ 「ああ」

ケイタ 「で、まあ別にシヨックとかはなくて。ほら、付き合っただけで妊娠の事は聞いたんで」

アオ 「うん」

ケイタ 「だから、その育てることも別に大丈夫っていうか気にしてないというか」

アオ (少し遮って)「誰だか知ってるんですか？」

ケイタ 「え？」

アオ 「父親」

ケイタ 「知らない・・・っていうか知りたくもないですよ。本人もかたくなに言いたがらないので。はい。言いたがらないこと言わせるのもね、あんまり良くないと思うんで」

アオ 「・・・まあ、ですよね」

ケイタ 「え、知ってるんですか？」

アオ 「・・・知らないですね(笑)」

ケイタ 「・・・なんか僕、なあなあになっちゃっていいと思ってるんですよ」

アオ 「・・・なあなあ？」

ケイタ 「はい、なあなあ・・・」

アオ 「なあなあ・・・」

間。やがて上から50歳くらいの女性の叫び声がする。

アオ 「あーもう。ちょっとすいません」

ケイタ 「あ、はい」

アオは机の上のお茶を一口飲んで出て行く。取り残されるケイタ。

ケイタ (呟いて)「・・・なーなー(笑)」

ケイタは手元のジャンプから包丁を抜き出した後、またしまう。その後、天井の方を何かを後悔するように眺める。やがてスツと立ち、ゆりかごの方へ行き、少し中を眺めた後、頭を抱えてうずくまる。

ドアのインターホンが1回なる。ケイタは顔を上げる。少しして、インターホンが3回ほど連続で鳴らされる。タクミの「はいはい。ちょっと待ってー」という声が聞こえる。やがてドアの開く音。ケイタはそそくさとこたつに座り、お茶を一口。口をつけた後、アオが飲んだ方だったことに気づき、少し怪訝な表情。

廊下側の引き戸が開く。太田ユキとタクミが入ってくる。

タクミ 「ちょっと、待ってもらっていい？」

ユキ (座りながら)「うん。え、終わったの？」

タクミ 「あとちょい」

ユキ (立とうとして)「あ、じゃあ手伝うよ。」

タクミ 「いいいい、すぐだから。アオも来ると思うし」

ユキ 「え、アオは？」

タクミ 「アオは・・・」(ケイタの方を向く)

ケイタ 「え・・・ああ、あのそっち・・・」(廊下の方を指さす)

タクミ 「あ、はい。(ユキに) あっちだって」

ユキ 「・・・うん(笑)」

タクミ 「だからちょっと待ってて」

ユキ 「今何やってんの？」

タクミ 「あ、ブルーシートでグルグルって、ガムテープで」

ユキ 「ああ」

タクミ 「工場のゴミのところにあったやつ、ブルーシート。あっちの畳の部

屋で」

ユキ 「そっか」

タクミ 「だから待ってて、すぐアオくると思うから」(出て行く)

沈黙の間。フクロウの鳴き声。以上の会話の間、ケイタは徐々にユキの顔の方を見るようになり、次第にガン見するようになる。

ユキ 「え、何ですか？」

ケイタ 「え？」

ユキ 「なんか私の顔付いてます？」

ケイタ 「え、いや」

ユキ 「あの、私さつき豆煎餅食べて。いや家にそれしかなかったただけなんですけど、だからカスとか・・・」

ケイタ 「え？」

ユキ 「豆煎餅。黒豆煎餅」

ケイタ 「あ、や、そんなカスとか、大丈夫です」

ユキ 「あ、じゃあよかった」

ケイタ 「ただなんか可愛いなって思って」

ユキ 「え？」

ケイタ 「顔が」

ユキ 「ああ、顔・・・私？」

ケイタ 「ええ」

ユキ ① 「あっありがとうございます・・・(笑)」

ケイタ 「いえいえ、そんな(笑)」

アオ (①と同時に)(声だけ台所の方から)「だから、何やったのかって聞いてんだよ！」

テツヤ (声)「何もやってないよ」

アオ (声)「や、そんなわけねえだろうって！え、母さんがあんなんになつてんだよ」

テツヤ (声)「だから知らないんだって」

アオ (声)「でも入ったんだろ？部屋」

テツヤ (声)「それはうめき声みたいのが聞こえたから。ウーウーみたいなのが。だからドアの前で大丈夫ですかーって言ったたら、無視されて、もう一回言ったら・・・」

アオ (声)「なんかやってんじゃないかねえかよ！」

テツヤ (声)「や、だってそれは・・・」

アオ (声)「そうゆうのがダメなの！」

テツヤ (声)「でも、それで扉開けた時にはだって・・・」

アオ (入ってきて、棚を物色する)「だから、だからさ、母さんは刺激をさしちやダメだって最初に俺言ったじゃん・・・あーやっぱりだ。ここにあった縄なくなってる。前、タマコの爪研ぎ用に買ってそのままのやつ」

テツヤ 「タマコ？」

アオ 「猫だよ猫。去年死んだんだけどさ、テツちゃんがこっちいた時もいたよ？」

テツヤ 「そうだったけ？」

アオ 「うん。つーか、あんなんで死ぬる訳ねえだろ、全く。自分の体重考えるよ、まじ」

テツヤ 「・・・でも、サツキさん相当ガリガリになってたね・・・」

アオ (激昂して)「そーゆうこと言いたいんじゃないんだよ！」(振り返った時に体がコタツに当たりコップが倒れる)

ユキ 「ああ」

間。皆がこぼれたお茶を見つめている。

ユキ (自分のバックからハンドタオルを出し拭こうとする)

アオ 「いいよ、タオル持ってくる」

ユキ 「うん」

アオ 「待ってて。(出て行こうとして) え、ユキ？」

ユキ 「うん」

アオ 「え、いつ来たの？」

ユキ 「さっき」

アオ 「あ、え、全然気づかなかった。(ケイタの視線を感じて) あ、彼女です。太田ユキ」(台所へ)

ケイタ 「ああ、彼女」

ユキ 「はい、ユキです。ユキ」

ケイタ 「あ、通りで」

ユキ 「？」

ケイタ 「肌がね、白いから」

ユキ 「・・・はあ」

ケイタ 「なんかピツタリですね、名前」

ユキ 「ありがとうございます (笑)」

アオ (少し前から戻ってきていて拭いている) 「え、なに、二人もう親しいの？」

ユキ 「いや、さっき」

ケイタ (同時に) 「や、全然」

アオ 「や、なんか知り合い感あったから (笑)」

ケイタ 「さっき少しだけ話して。あの煎餅食べてきたとか」

アオ 「煎餅？」

ケイタ 「豆煎餅。あ、黒豆煎餅」

アオ 「あっそうですか (笑)」

間

アオ (突っ立っているテツヤに) 「あのさ、もう寝ていいよ」

テツヤ 「いや、でも」

アオ (遮って) 「いや、まじで迷惑だからさ。もうばあちゃんも寝てるんだから」

テツヤ 「・・・うん」 (動かない)

アオ 「あのさ、こっちも色々あんの！そんなテツちゃんがなんか起こしても対応できねえんだよ！だからもうテキトーにばあちゃんの世話だけしてくれればいいから！」

テツヤ 「・・・ごめん」

アオ 「あー本当にめんどくさい」

テツヤ 「・・・」

アオ 「早く行ってくれる？」

テツヤ 「うん」 (出て行くとして、台所側の引き戸を開ける)

アオ (テツヤの背中に) 「おやすみ」

テツヤ 「・・・おやすみ」 (出て行く)

アオ (大きいため息)

間

ケイタ 「・・・あのキョウちゃんは？」

アオ 「え、ああ、あのあっちに」

ケイタ 「何やってるんですか？」

アオ 「いや、なんか普通に」

ケイタ 「普通？」

ユキ 「え、キョウちゃんいるの？」

アオ 「うん、今、畳の部屋。あの、処理を、タクミと」

ユキ 「ああ」

ケイタ 「処理？」

アオ 「いや、あのこっちの話で」

ケイタ 「え、何ですかそれ」

ケイタのセリフと合わせて、インターホンが鳴る。アオはその場から逃げるように「あー」とか言って廊下へ出て行く。ドアが開く音。

サヤ (声だけ) 「あ、あの夜分遅くにすいません」

アオ (声) 「え、サヤちゃん・・・？え、どうしたの？」

サヤ ② (声) 「いや、どうってアレじゃないんですけど」

アオ (声) 「うん」

サヤ (声) 「父、来てないですかね？」

アオ (声) 「え、お父さん」

サヤ (声) 「はい、まだ帰ってなくて。もうだいぶ遅いのに。それで、あの満月だから」

アオ (声) 「え？」

サヤ (声) 「あの人よくわかんないんですけど、満月だと何故か違う人の家帰っちゃうことがしょっちゅうあって」

アオ (声) 「満月ってだって・・・」

サヤ (声) 「あの、この辺だいたいぶ回ったんだけど、いなくて、だからあの、いるとしたら、アオ君のそこだと思って」

アオ (声) 「・・・あー・・・あのちょっと待ってて」

キョウカ (②と同時に) (廊下の引き戸を開けて入ってくる)

ケイタ 「あ、キョウちゃん」

キョウカ (ユキの方に向いて) 「あ」

ユキ 「どうも」

キョウカ (会釈)

ユキ 「終わりました？」

キョウカ 「・・・とりあえずは」

ユキ 「・・・あ、出産、おめでとうございます」

キョウカ 「ああ・・・」

ユキとキョウカの間に謎の緊張感。

アオが引き戸を開けて入ってくる。

アオ 「・・・なんか、めんどくせえわ・・・」

暗転。

〈2場〉午前2時半

明転。舞台上には鳥島サヤとキョウカがいる。2人とも缶チューハイを飲んでおり、こたつの上に空き缶もいくつがある。サヤは少し酔っているのか、妙にテンションが高い。ジャンプはこたつの端に。

キョウカ 「え、それがサヤちゃんの本命？」

サヤ 「えー違います！」

キョウカ 「じゃあその、そうゆう活動の？」

サヤ 「活動・・・？(笑)」

キョウカ 「うん、パパ活動」

サヤ 「ああ、パパ活(笑) まあそんなところです」

キョウカ 「それでこんなビトンの」

サヤ 「はい(笑)」

キョウカ 「すごいだね、東京」

サヤ 「アレ、あの人はどうやって知り合っただんですか？」

キョウカ 「あの人・・・あ、アレ？」(上の指さす)

サヤ 「はい、婚約者の」

キョウカ 「うーん、なんか紹介というか、お見合い的な？」

サヤ 「お見合い？えー、そんな結婚したいんですか？」

キヨウカ 「んーしたいというか、したほうがいいよって言うから」

サヤ 「いくつでしたっけ？」

キヨウカ 「私？24」

サヤ 「ですよね？私の2個上って普通考えないですよ。30独身とかザラですから」

キヨウカ 「それは東京の話でしょ？」

サヤ 「まあ」

キヨウカ 「こっちはね、根本的に時間の流れが違うのよ」

サヤ 「はあ、そうゆうもんですか（笑）」

キヨウカ 「あれ、今はお仕事は？」

サヤ 「してないです、父も母も元気なんで。こっち帰ってからプータロ―です（笑）」

キヨウカ 「・・ああ、女の子なのに（笑）」

サヤ 「ああ、じゃあプー子だ。（立ってゆりかごへ）可愛いですね。どっち似ですか？」

キヨウカ 「どっち？」

サヤ 「キヨウカさんか、あの婚約者さん」（玄関が開く音）

キヨウカ 「・・わからん。まだ人っていうよりグレイだもん」

サヤ 「グレイ？」

キヨウカ 「エイリアンよ（笑）」

サヤ 「（笑）」

廊下側の引き戸が開き、雨に濡れた様子のタクミが入ってくる。

タクミ 「キヨウちゃん、タオルある？」

キヨウカ 「台所入って、右の下のところ」

タクミ 「わかった」（台所に消える）

サヤ 「何してるんですか？」

タクミ （声）「や、ちよっと色々ね」

サヤ 「はあ」

タクミ （声）「サヤちゃんはまだ帰らないの？」

サヤ 「んー・父はどうせ明日には帰ってくるし、もういいかなって」

タクミ （入ってくる。手にはタオルが7枚ほど）「ああ、そう」

キョウカ 「そんないっぱい？」

タクミ 「もうね、靴下とズボンがビショビショ」(廊下に消える)

サヤ 「さっきまで満月だったのに」

キョウカ 「え？」

サヤ 「うちの父、満月だと徘徊していなくなっちゃうんですよ。なぜか」

キョウカ 「そうなんだ(笑)」

サヤ 「ほんと困っちゃいますよね(笑)」

間

サヤ 「・・・好きなんでしょ？」

キョウカ 「え？」

サヤ 「アオ君のこと」

キョウカ 「・・・えーお兄ちゃん？なにそれ(笑)」

サヤ 「見れば、わかりますよ(笑)」

キョウカ 「や・・・」

サヤ 「どうすんですか。コレとか・・・」(ゆりかごを指す)

キョウカ 「(笑)」

サヤ 「・・・なんか協力しましょか？」

引き戸が空いてアオとユキとタクミが入ってくる。

アオ 「あれ、まだいたんだ」

サヤ 「あ、はい。大丈夫ですか？」

アオ 「あー・・・うん、まあ平気」

サヤ 「なんかすいません、楽しくなっちゃって(笑)」

アオ 「いや、全然」

サヤ 「ちよっとトイレ行ってきます」

キョウカ 「あれ、さっきも行ってなかった？」

サヤ 「飲み過ぎかもです(笑)」(廊下へ出て行く)

タクミ (空き缶を見て) 「結構飲んだね(笑)」

キョウカ 「ほぼあの子だよ」

タクミ 「えー、まじか。お酒強いんだ」

キョウカ 「東京仕込みだからね(笑)」

タクミ 「東京仕込みね(笑)」

アオ 「・・・あのさ、早く帰ってもらってよ」

キヨウカ 「無理でしょ。逆に怪しまれる」

アオ 「そんなことないでしょ。あの子の父親なんだよ？俺らが殺したの。わかってる？」

キヨウカ 「わかってるよ。積み込んだの？」

アオ 「うん」

キヨウカ 「上手く積み込めた？」

アオ 「後ろの椅子をさ、倒してその上に置いたらいけたわ」

キヨウカ 「そっか。明日？」

アオ 「うん、サヤちゃんとかが帰ったらさ、まあどっかに埋めようかなと」

キヨウカ 「え？」

アオ 「だって、急に俺らいなくなったら、それもそれで怪しまれるって」

キヨウカ 「うーん大丈夫なの？それ」

アオ 「んー、多分」

タクミ 「・・・あのさ、俺的にはね、海とかの方がいいと思うんよ。海。なんか、流されるし」

アオ 「海？」

タクミ 「流されちゃった方が安全だと思うんだよね」

アオ 「あーうん」

問

タクミ 「あのさ・・・なんかさつき俺悟ったんだけど」

アオ 「え、なに？」

タクミ 「なんか、絶対世の中の殺人事件ってさ、捕まってる人よりも捕まってるない人の方が多いと思うんだよね。や、だってさ、人間って結構簡単に殺意を覚えるし、結構簡単に殺せちゃうって俺今回のことでわかったもん」

アオ 「何急に（笑）」

タクミ 「や、だからさ、ニュースに出てるのが大きく取り上げられてるけどさ、その影で多分いっぱい起こってるんだと思うの。だから俺らも普通に大丈夫だと思うんだよ」

アオ 「はあ、で、海？」

タクミ 「うん、多分平気。つーか今回の俺、全然もう一人くらいいける

と思ったもん」

ユキ 「・・・あのさ、なんかハイになってるよね？」

タクミ 「え？」

ユキ 「なんかテンション高いでしょ？」

タクミ 「えー高いかもしれん（笑）」

ユキ 「殺人ハイ」

アオ 「え、ダサイ」

ユキ 「殺人ってなんていうの？」

アオ 「英語？」

ユキ 「うん」

アオ 「えっと」（スマホを出す、また充電がない）（タクミに）「調べて」

（自分はスマホを充電器に差す）

タクミ （調べて）「えーっと・・・マードー？」

ユキ 「じゃマードーズハイだ（笑）」

タクミ 「・・・や、なんか余裕なかったんだよね俺。正直、怖かったし殺した時とか、ずっと心臓バクバクしてて。特に首絞めてグタってなって、シヨンベンがさ、ダラーって出てきた時とか。バレたらヤバイとか思ってた。でもさっき畳の部屋から車に死体運んで、積み込んで、なんか急に余裕というかさ、そういうのが出てきたんだよ」

ユキ 「・・・よかったじゃん」

タクミ 「マジでこの勢いでもう一人くらいいける気してきた」

ユキ 「ダメだよ（笑）」

タクミ 「いや、やらんけどね（笑）」

ユキ 「・・・あ、タオル貸して。洗濯機入れてくる」

アオ 「あ、サンキュー」

ユキ （アオとタクミからタオルを受け取り、出て行く）

アオ 「何？彼女のこと？」

タクミ 「え？」

アオ 「殺したいとかどうこうって」

キョウカ 「え、なに？上手く行ってないの？」

アオ 「別れたんだってさ」

キョウカ 「えー」

タクミ 「そうなんだよね（笑）別れた別れた」

キョウカ 「え、なんで？」

タクミ 「んーそれがさ、理由は無いらしいんだよね」

キョウカ 「は？」

タクミ 「でもね、すごいあからさまだよ？そーゆー営みの回数がね、日に減ってくるの。週3回くらいはしてたんだよ最初は。でもね、半年ちよいかけてジワーって減ってくるの」

キョウカ 「最終的には？」

タクミ 「1ヶ月に一回するかしないか」

アオ 「うげーやば」

タクミ 「もうD>だよ。暴力暴力、コレは」

アオ 「うん、暴力だね（笑）」

タクミ 「（キョウカに）「・・・あれ、週いくつ？」

アオ 「おい」

タクミ 「や、別にただの興味なんだけど」

アオ 「・・・」

キョウカ 「（チラッとアオを見てから）「2、3回かな」

アオ 「お前そうゆうこと・・・」

タクミ 「（同時に）「やっぱそんなもんだよねー（笑）」

キョウカ 「でも、まあ最近まで、アレ」（ゆりかごを指さす）

タクミ 「あ、そっか、そうだよね（笑）」

問

キョウカ 「・・・でも、なんかサツキさんも言ってたよね」

タクミ 「ん？」

キョウカ 「いや、セックスがなくなったって」

アオ 「キョウカ？」

キョウカ 「なんか最後にサツキさんのこと見た時な気がする。ここでサツキ

さんがお茶飲んでて、お茶となんかお菓子・・・いやリングゴ食べてて・・・」

タクミ 「うん」

キョウカ 「それで一緒にお茶をね、飲んでたんだけど。その時にお父さんのセックスがなくなっちゃったんだよねって私に。いや、そんな話私にする？って思ったんだけど。なんかでも悲しそうで。それでその日の夜から部屋から出て来なくなっちゃって、それで今に至るってゆう・・・」

タクミ 「そうなんだ・・・」  
キョウカ 「うん」  
アオ 「・・・この話やめようよ」  
キョウカ 「あ、ごめん」

間

タクミ (気まずくて) 「・・・松岡修造って性欲強そうだよね・・・」  
アオ (反射的に変に強く) 「あ？」  
タクミ 「いやごめん、なんでもない」  
ユキ (入ってくる)  
タクミ (恥ずかしそうに) 「あ、おかえり(笑)」  
ユキ 「・・・何の話してたの？」  
タクミ 「あ、松岡・・・」  
キョウカ 「いや、なんでもないよ」  
ユキ 「え？なに？」  
タクミ 「・・・や、何でも(笑)」  
ユキ 「あ、洗濯機いっぱいだったからさ、脇のカゴに入れたんだけど平気？」  
アオ 「うん、それで大丈夫。ありがとう」  
ユキ 「うん」  
アオ 「・・・あのさ、ちょっとさ、席外してくんね？二人」  
タクミ 「俺ら？」  
アオ 「うん悪い。ちょっとキョウカと話したいことあって」  
ユキ (あからさまに不機嫌に) 「え、何話すの？」  
アオ 「ちよつとね・・・俺の部屋行って、わかるでしょ？」  
ユキ 「・・・わかるけど、なんで」  
アオ 「じゃあ、ごめん。そっち行ってもらって」  
ユキ 「いや、でも」  
アオ (遮って) 「お願いだから」  
ユキ 「・・・いや」  
タクミ 「・・・行こ。疲れてるんだよ、アオは」  
ユキ 「・・・」  
タクミ 「ほら」(ユキを促して出て行く)

沈黙の間。フクロウの鳴き声。

キヨウカ 「え、なに？話って」

アオ 「・・・」

キヨウカ 「雨でもフクロウ鳴くんだね」

アオ 「フクロウ・・・」

キヨウカ 「それともあれ？もう止んだ？雨」

アオ 「・・・あのさ、母さんの話、あんまりするなよ」

キヨウカ 「え？」

アオ 「いや、わからない？今、今だよ。別に他の日ならいいよ。でも今母さんの話するのは違うでしょ」

キヨウカ 「なんで？」

アオ 「なんでって・・・他に気にすることがいっぱいあるから。普通に考えてやばいでしょ。サヤちゃんが家いるんだよ？あれの父親を俺ら殺したんだよ？だから他のめんどうなこと思い出させないでくれよ。お前の婚約者もなぜかいるし。」

キヨウカ 「そっちじゃん」

アオ 「？」

キヨウカ 「お兄ちゃんが気にしてるのはケイちゃんの方でしょ？」

アオ 「どうゆうこと？」

キヨウカ 「だから、お兄ちゃんが気にして焦ってるのは、お母さんがどうこうじゃなくて、ケイちゃんがウチに来たからでしょ？」

アオ 「え、その話する？」

キヨウカ 「する」

アオ 「なんでよ。それはだってあの人も自分で育てるって言ってんだからさ」

キヨウカ 「そうゆう問題じゃないでしょ？」

アオ 「そうゆう問題でしょ。あの人と結婚してあの人と育てる。あの子の親はあの人ってことにするって話だったじゃん。それで万事解決だって」

キヨウカ 「でもだって本当はさ」

アオ 「本当なんてどうでもいいんだよ！」

キヨウカ 「それじゃダメなの」

アオ 「なんで!？」  
キヨウカ 「ねえ、なんでそっちが怒るの？」  
アオ 「別に怒ってねえよ」  
キヨウカ 「怒ってる！」  
アオ 「そっちだっけとイライラしてるじゃんか！」  
キヨウカ 「だって私は、勝手に変な事件に巻き込まれたから！」

2階から女性の叫び声。二人は上を向く。

アオ 「あー！なんで寝てないんだよ！」

間

キヨウカ 「・・・私別にあの人のこと好きなわけじゃないから」  
アオ 「知らないよ」  
キヨウカ 「お兄ちゃんは、私のこと好きなんですよ？」  
アオ 「お前、そういうこと今言うなって」  
キヨウカ 「前好きだっけって言った」  
アオ 「そんなこと・・・」  
キヨウカ 「(遮って)「早くユキちゃんと別れてよ」」  
アオ 「なんでそうゆうのを今・・・」  
キヨウカ 「いいじゃん。あの子(子供)はどうにかなるから」  
アオ 「なんないよ」  
キヨウカ 「大丈夫だよ、絶対」  
アオ 「無理でしょ・・・(ため息をして)なあ、ほんとしっかり考えてくれって・・・」  
キヨウカ 「・・・」  
アオ 「ほんとしっかり考えてくれって！」

間

キヨウカ 「・・・ユキちゃんのためには人殺すのに・・・」

2階からドンドンというような床を叩く音。

アオ (上を気にしながら立つ。スマホを充電器から抜く)「お前の子供だから」

キヨウカ 「は？」

アオ 「あの子はお前が産むって言ったんだから」

キヨウカ 「・・・」

アオ 「こんな時にまで俺は母さんの事考えたくねえんだよ」

キヨウカ 「・・・」

アオ （上を気にして）「・・・うるさいな」（出て行く）

キヨウカはアオの背中を見送った後、「上手くいかないなあ」と聞こえるか聞こえないか程度に呟いて、こたつの上の空き缶を持てるだけ持って台所に消える。舞台上に誰もいない沈黙の空間。上から、「何で鍵かけてんだよ！おい！」というアオの怒鳴り声。上を気にしながら、キヨウカが戻ってきて、コタツに座ると、ジャンプをこたつの中央らへんに引き寄せる。

サヤ （廊下側から入ってきて）「何ですかアレ？」

キヨウカ 「ああ、サツキさん」

サヤ 「サツキ？」

キヨウカ 「だからえっと、私の義理の母親、お兄ちゃんの親」

サヤ 「えー、私なんか心霊現象かと思いましたよ（笑）」

キヨウカ 「わかる（笑）」

サヤ 「病気ですか？」

キヨウカ 「なんか精神的な？」

サヤ 「へーなんかあったんですか？」

キヨウカ 「まあ・・・（笑）」

サヤ 「え、何ですか？」

キヨウカ 「サヤちゃんね、そんな人の家のこと詮索するもんじゃないよ」

サヤ 「あ、すいません」

アオ （声だけ）「おい、開けろって！」

サヤとキヨウカとケイタ（少し前から入っている）は上を向く。

ケイタ 「あのさ、お酒もらっていい？」

キヨウカ 「あ、起きてたの？」

ケイタ 「うん」

キヨウカ 「冷蔵庫」(台所の方を指さす)

ケイタ (台所の方に消えた)

サヤ 「寝れないんだってよ」

キヨウカ 「そうなんだ」

サヤ 「なんかスゴイらしい。てかスゴかったもん」

キヨウカ 「なにが？」

サヤ 「同室の人のイビキ(笑)」

キヨウカ 「あ、テツちゃん(笑)」

ケイタ (戻ってくる。手にビール)「ビール、もらうね」

キヨウカ 「どーぞ」

ケイタ 「すごいよ、あの人のイビキ」

キヨウカ 「ああ、ごめんね(笑)」

ケイタ 「全然」(自分のスマホを充電器に差す)

間 (上からドアを強く叩くような音)

サヤ (上を気にしながら)「・・・あの、アレらしいですね。赤ちゃん。

二人の子じゃなかったんですね」

ケイタ 「ちよっと？」

サヤ (ケイタに)「さっきも言いましたけど、それについてはね、しっかり話し合った方がいいと思うんですよ」

ケイタ 「だから・・・少なくとも君が・・・」

サヤ (遮って)「や、わかりますよ。私が部外者なことぐらい。でもこ

のままっていうのもあんま良くないと思うんですよ。何でしたっ

け？なーなー？」

ケイタ 「なあなあ」

サヤ 「それはね、よくないと思うんです私。(キヨウカに)あ、さっき

全部聞いたんですよ。トイレの所で会って」

キヨウカ 「ああ」

サヤ 「あの、好きなんですか？お互い」

ケイタ 「は」

間 (上からドアを強く叩くような音)

ケイタ (上を気にしながら)「・・・好き・・・だよ？てかなに言わされてん

の俺。こんな深夜に」

サヤ 「ああ、好き・・・(笑)」

ケイタ 「ああ、好き・・・(笑)」

ケイタ (部屋の時計をチラ見)「ねえ、もう3時前(笑)」

サヤ 「キョウカさんは？」

キョウカ 「えー(笑)」

ケイタ 「やめよやめよ。何も得しないってこんなことしても」

サヤ 「いやでも」

ケイタ 「好きとかさ、そうゆうんじゃないんだよ、婚約って」

サヤ 「じゃあ、何なんですか？」

ケイタ 「・・・や、わかんねえけど」

間(上から音)

キョウカ 「・・・え、好きとかじゃないの？」

ケイタ 「は？」

キョウカ 「すごい好きなのかと思ってたけど」

ケイタ 「ああ、や、好きだよ？」

キョウカ 「や、でも今好きとかじゃないって」

ケイタ 「え、え、どうゆうこと？」

キョウカ 「好きじゃないのに婚約したの？え、なんで？義務とか使命ってこ

と？」

ケイタ 「いや、だから」

キョウカ 「なに」

ケイタ 「は？え、だから好きだし。だから、この子育てるし」

キョウカ 「でもだから、好きじゃないなら育てなくていいんだし、ケイちゃん

んが」

ケイタ 「いやえ、なに？・・・え？」

サヤ 「てか、てかそこなんですよ。その育てる云々のところをさ、一

回しっかり、話し合いましうって私は」

ケイタ 「ねえ、ちょっと」

キョウカ (同時に)「育てる云々って？」

上からアオの怒鳴り声と音。皆が驚いたように上を向く。沈黙が生まれる。サヤは手持ち無沙汰になりジャンプをイジる。

ケイタ (上を気にして)「・・・うわ、なんかヤバイね」

サヤ (上を気にして)「うん、ヤバイ」

上からの音が絶え間なく続く。そんな中、サヤがジャンプから包丁を滑らせて床に落とす。

サヤ (驚いて立つ)「きゃっ！」

ケイタ (つられて立つ)「え？なに？」

キヨウカ (つられて立つ)「なに？」

サヤ 「なんか出てきて！」

キヨウカ 「なにか？」

間

サヤ 「・・・あ、包丁だ」

ケイタ 「あ、なんか挟んであったやつ」

サヤ 「え、なんで？危ない」

ケイタ 「なんかお兄さんが」

サヤ 「アオ君？」

ケイタ 「うん、なんか挟んでたやつ。そのジャンプに」

サヤ 「そうなんだ。え、なんで？」

キヨウカ (包丁を拾い上げジャンプに挟みこたつの上に置く)

いつの間にか上からの音は消えている。沈黙の間。

キヨウカ 「・・・え、育てる云々って？」

サヤ 「あ、そっか途中に」

キヨウカ 「うん」

サヤ 「や、もう言っちゃった方が良くないですか？」

ケイタ 「いい、いい、やめて」

キヨウカ 「え、なに？」

ケイタ 「いや、なんでもないから」

キヨウカ 「何その感じ」

サヤ 「あの、ほんとに良くないですから、その我慢とか」

キヨウカ 「我慢？」

ケイタ 「や、我慢なんてないからほんとに」

キヨウカ 「なにそれ」

廊下側の引き戸が開く。眠そうなテツヤが立っている。

テツヤ 「あ、あの、あのアオの友達の人います？」

ケイタ 「ああ、あの人・・・えっと」

キョウカ 「タクミくんなら、アオの部屋に」

テツヤ 「そっか、ありがと。(出て行きかけて) あ、もらっていいですか？コレ(ビール)」

ケイタ 「あ、どうぞ」

テツヤ 「いただきます」(飲む)

ケイタ 「・・・」

テツヤ 「・・・あ、口つけちゃったんですけど」

ケイタ 「あ」

テツヤ 「あ、大丈夫な人でした？」

ケイタ 「あ、えーと、多分もうほぼなかったですよね？中身」

テツヤ (振ってみて)「ええ」

ケイタ 「じゃあ、全部飲んじゃって・・・」

テツヤ 「あ、ありがとうございます」

サヤ (フラーっと台所に消える)

テツヤ 「あの、もしよかったら来ます？」

ケイタ 「え？」

テツヤ 「なんかこの母親、鍵閉めて引きこもっちゃってて、強行突破しようと思って。男手探してるんですけど」

ケイタ 「あ、やりますよ」

テツヤ 「ありがとうございます。あの上行ったらアオがいると思うんで」

ケイタ 「あ、わかりました」

テツヤ 「じゃあ」(消える)

間

ケイタ 「じゃあちよっと行ってくるね」

キョウカ 「・・・」

ケイタ 「じゃあ」

キョウカ 「やっぱり育てるのしんどいんでしょ？その子」

ケイタ (ゆりかごを覗いて)「・・・そんなことない(笑)・・・かわいいよ(笑)」

キヨウカ 「なんでそんな育てたいの、その子」

ケイタ 「え、そんなっていうか普通じゃない。だって、その、婚約してるわけだから」

キヨウカ 「普通じゃないよ。なんか変に執着してる」

ケイタ 「そんなことないよ」

キヨウカ 「やならやめた方がいいんだよ」

ケイタ 「は・・・なんか変だよ。やっぱ疲れてるんだよ」

キヨウカ (ため息)

ケイタ 「・・・俺も疲れてるんだよ」

キヨウカ 「・・・」

ケイタ 「じゃあ」(出て行く。スマホが置きっぱなしだ)

間

キヨウカ (もう一度大きなため息)

サヤ (戻る。手にハイボールの缶)「コレでラストでした」

キヨウカ 「ビールなら、まだ、あっちの畳の部屋・・・あ」

サヤ 「あっちの畳？」

キヨウカ 「や、ビールならまだあるから欲しかったら言ってみて。取ってくるよ」

よ

サヤ 「私ビール飲めないんですよ」

キヨウカ 「そう(笑)」

間

キヨウカ 「・・・そんなに他人のに踏み込まなくていいんだよ？」

サヤ 「え？」

キヨウカ 「他人の色々ね、土足で踏み込まない方がいいって」

サヤ 「え、そんな私踏み込んでます？」

キヨウカ 「うん、だいぶ」

サヤ 「でも、やじゃないですか？コレから結婚するんですよ？二人」

キヨウカ 「・・・」

サヤ 「私的にはやめた方が良くと思うんですよ(笑)」

2階から「ドンドン」というような先ほどよりも大きな音。

サヤ 「あ、始まった」

キョウカ 「うん」

サヤ 「毎日こんな感じなんですか？ 大変ですね」

キョウカ 「いや、今日は特殊かな、異常」

サヤ 「そうなんですね。あ、やっぱ、満月だから」

キョウカ 「ん？」

サヤ 「今日は満月だからですかね？ やっぱり、満月は人を狂わせるんですよ・・・」

キョウカ 「・・・」

間

サヤ 「デートとかするんですか？」

キョウカ 「え、あんましないかな」

サヤ 「そっか」

キョウカ 「あ、でも一回だけ旅行は行ったよ。温泉だけど。あっちの親がお金全部出してくれたから」

サヤ 「ん？」

キョウカ 「でもそのくらいかな」

サヤ 「や、そうじゃなくて」

キョウカ 「え？」

サヤ 「アオ君と」

ドアが破られるような大きな音。続けて、ドタドタとした大勢の足音と、アオを筆頭に少し強い口調の声が聞こえる。

サヤ 「開いたんですかね？」

キョウカ 「んー多分」

サヤ 「大変だ」

間

キョウカ 「ほとんどしないかな、遠出は」

サヤ 「ああ、アオ君と」

キョウカ 「うん、だって一緒に住んでるし。お母さんもおばあちゃんもいるし」

サヤ 「そっか・・・でもまあ性行為はするんですもんね」

キヨウカ 「え、何？」

サヤ 「カンです（笑）」

キヨウカ 「・・・まあ最近は全然。この子お腹にいたし私（笑）」

サヤ 「なんかー、ブロッコリーとかタコがいいみたいですよ、性欲上げるには」

キヨウカ 「は、なんでそんなこと知ってるの？」

サヤ 「YouTubeで見ました、シミケンの（笑）」

キヨウカ 「（笑）」

間

サヤ 「・・・良いこと聞きます？」

キヨウカ 「うん、なに？」

サヤ 「なんか好きじゃないっぽいですよ」

キヨウカ 「え？」

サヤ 「なんか、気持ちの整理の仕方に困ってるらしいですよ。子供のこ  
と見てから特に。あ、あの婚約者さん」

キヨウカ 「ああ（笑）」

サヤ 「・・・嬉しいですか？」

キヨウカ （笑って）「好きじゃないって言われて、嬉しい人なんている訳な  
いじゃん（笑）」

サヤ 「ニヤけてますけど」

キヨウカ 「なんとなくそうなんじゃないかとは思ってたしね」

サヤ 「あっちが好きじゃないなら、思いっきりアオ君の方行けば良いん  
じゃないですか？旅行とか誘えばいいじゃないですか」

キヨウカ 「あのさ、大前提兄妹だからね」

サヤ 「まあ、そうですね・・・」

キヨウカ 「・・・でも、やっぱり私に対しての気持ちは薄れてきてるよねえ  
（笑）」

サヤ 「そうらしいっす（笑）」

キヨウカ 「・・・でかした（笑）」

サヤ 「ありがたき幸せ（笑）」

二人が笑っていると、引き戸が空きタクミとテツヤがいる。

タクミ 「あれ、俺の上着この辺になかった？」

キヨウカ 「え、見てないけど」

タクミ 「あれ、そっかー。あっちの部屋かな」

キヨウカ 「どうしたの？」

タクミ 「いや、なんか今度は月が見たいとか言い出しちゃって・・・」  
(出て行く)

キヨウカ 「サツキさん？」

テツヤ 「うん、月見たいって喚き出しちゃってきかないから」

サヤ 「赤ちゃんじゃん」

テツヤ 「ほんとそんな感じで・・・というか、ばあちゃん大丈夫なの？」

キヨウカ 「大丈夫とは？」

テツヤ 「あんだけ騒いだけど、全く起きる気配ないから」

キヨウカ 「ああ」

テツヤ 「まあ、とりあえずはサツキさんの方どうにかしないとなんだけど

(笑)

サヤ 「あれ、雨大丈夫なんですか？」

テツヤ 「雨？」

サヤ 「や、なんか30分くらい前だよな？アオ君たちが外から来た時、

結構な雨だったみたいですけど」

テツヤ 「あ、今はね、晴れてる」

サヤ 「あ、じゃあ」

テツヤ 「綺麗な満月」

サヤ 「そうなんですな」

テツヤ 「で、みんな外、川の方まで行こうかなって話になってるけど、  
二人はどう？」

サヤ 「あー私はいいですかね。ちょっと寝たいんで」

テツヤ 「わかった。キヨウちゃんは？」

キヨウカ 「うーん、じゃあ私は行こうかな」

テツヤ 「あ、じゃあみんな待ってるから、外んところ」

キヨウカ 「わかった」

テツヤ 「じゃあ、待ってまーす」(出て行く)

間

キョウカ (立ちながら) 「じゃあ私も」

サヤ 「あ、あの人がかがいた部屋で私寝て良いですか？」

キョウカ 「あ、いいよ。綺麗かどうかかわかんないけど。テツちゃんが使ってる部屋だから」

サヤ 「それは、はい、別に (笑)」

キョウカ 「じゃあ、自由に使って」 (出て行く)

取り残されたサヤ。サヤは立って、ゆりかごの方に行く。

サヤ (猫撫で声で) 「・・・かわいいそうだな〜あんだ・・・かわいいな

〜・・・あれより私は道具じゃねえんだよって言ってやれよ

〜・・・あ、私でいいのか？俺？あんだ女？男？あ、名前聞いとけばよかった・・・あんだどっちなんだ？や、答えられないよな〜・・・かわいいそうだな〜ほんとに・・・ねむ」

サヤはフラフラと出て行く。誰もいない空間。フクロウの鳴き声が聞こえる。やがて、引き戸が開き、ユキが入ってくる。手にはリカちゃん人形が握られている。ゆりかごの方を少しの間見た後、こたつの上のジャンプに目を向け、そこからスツと包丁を抜き出す。引き戸がガラガラと空き、ケイタが入ってくる。

ケイタ 「あ、やっぱここだ」 (スマホをポケットに入れる) 「あ、どーも」

ユキ 「どーも」

ケイタ 「あれ、なんでしたっけ？シロ？」

ユキ 「え？」

ケイタ 「あ、名前」

ユキ 「ああ、ユキです。太田ユキ」

ケイタ 「そうだそうだ・・・あ、そんなのどこにあったの？」

ユキ 「え、このジャンプの中に」

ケイタ 「や、そっぢゃなくて、人形の方。俺久しぶりに見たわ、それ」

ユキ 「ああ、アオの部屋に」

ケイタ 「そうなんだ (笑)」

ユキ 「ええ」

ケイタ 「何に使うの？それ？」

ユキ 「え、いやなんか可愛くて懐かしいなって思っ」

ケイタ 「や、そっぢゃなくて」

ユキ 「ああ・・・いや別に」(ジャンプにしよう)

ケイタ 「・・・いや、でもさ、俺もさ、なんか何回も思ったから今日だけで、びっくりした(笑)」

ユキ 「え？」

ケイタ 「なんかどう扱った良いかわかんなくて・・・気持ちも・・・その子も・・・(笑)」

ユキ 「・・・あ、え、それって？」

ケイタ 「うん、そうなんだよ・・・(笑)」

ユキ 「・・・やっぱ・・・」

間

ケイタ (ゆりかごの方に行き、中を覗き込む)

ユキ 「あ、行かなくて大丈夫ですか？みんなのところ」

ケイタ 「うん、もう少しだけ」

ユキ 「ああ」

間 (フクロウの鳴き声)

ケイタ (ユキの方を向いて真剣な顔で)「あのさ・・・」

ユキ 「・・・なんですか？」

ケイタ 「・・・ライン交換しない？」

暗転。

〈3場〉午前3時半

明転後、舞台上にはキョウカ、ユキ、テツヤ、タクミ、アオがいる。キョウカの手にはリカちゃん人形が握られている。キョウカだけが立っている。緊張感のある間。

テツヤ 「・・・えっとだから、もう一回最初から考えよ。俺らが外に出た時

はいたんだよね？」

タクミ 「ええ俺、上着取り来たんで」

テツヤ 「ああ」

タクミ 「なんか外出たら寒かったから。その時はいましたよ」

テツヤ 「うん、それで戻ってきてから、この部屋来たのは？」

タクミ 「キョウちゃんの婚約者さんじゃないですか？スマホ取りに帰った」

テツヤ 「いやでも、流石に自分の息子をつてのは考えられないでしょ？」

タクミ 「まあそうかもですけど。でも戻ってこないのおかしくないですか？」

アオ 「あれ、あの人が今どこ？」

テツヤ 「俺の部屋で寝てた」

アオ 「ああ」

テツヤ 「いや、あの人はさ、ちょっと半分無理矢理連れ出したようなもんだし。大体父親でしょ？犯人じゃないよ」

タクミ 「・・・そうしたら、ユキちゃん？」

テツヤ 「え？」

ユキ (同時に) 「え？」

タクミ 「や、俺も全然思っていないよ？思っていないけど、でも普通に、普通っていか理論的に考えたら、この部屋来る人ってユキちゃんくらいじゃないって思っただけで」

ユキ 「いやそんな・・・あの子は？隣の」

タクミ 「サヤちゃん？」

ユキ 「うん、だからバレて恨まれてみたいな」

テツヤ 「バレて？」

タクミ 「いや、違う。こっちの話。ユキちゃん」

ユキ 「ああ・・・」

アオ 「でも、寝るって言っても寝てない可能性もあるしね」

ユキ 「そうだよ」

タクミ 「まあ確かに？」

テツヤ 「全然わかんないな・・・」

問

キョウカ (人形をおもむろに床に投げつける)

テツヤ 「ちよっと？」

キョウカ (床に体育座りで座り込む)

テツヤ 「大丈夫？キョウちゃん」  
キョウカ (無視)

間

タクミ 「でも、アレかも、自分で歩いてさ、出て行っちゃったとか」  
キョウカ 「・・・そんなことあるわけないでしょ!!!」  
タクミ 「・・・あ、しゃべった・・・」

間

タクミ (周りからの冷たい視線を感じ) 「ごめん、俺、トイレ。あ、ついでにサヤちゃん起こしてくるよ。あの子いた方がいいでしょ？この議論」(足早に消える)

沈黙の間。フクロウが鳴く。

テツヤ 「・・・今サツキさんは？」

アオ 「は？」

テツヤ 「いや、部屋にいるの？」

アオ 「え、今関係ある？」

テツヤ 「いやないけど」

アオ 「じゃあ聞くなよ」

テツヤ 「や、でも川で着いて月見たらすぐ、みんな知らない間にいなくなってたから」

アオ 「・・・上で寝てるよ。さっき見てきた」

テツヤ 「そっか、ならね・・・でもさ、そんなことある？みんなで川まで連れてったのに、誰も気づかないうちに家帰ってるとか、そんなさ・・・」

アオ (無視して) 「・・・ほんとに・・・」(台所に消える)

テツヤ (ユキに) 「・・・何してたの？」

ユキ 「え？」

テツヤ 「や、疑ってるわけじゃないんだけどさ、何してたのかなって、単純な疑問。俺ら外出してたから」

ユキ 「・・・えっと、いました」

テツヤ 「え？」

ユキ 「家にいました」

テツヤ 「え、それはどうゆうこと？」

ユキ 「だから普通に、何をしてたとかではなく、いました」

テツヤ 「ああ、まあそうだろうけど・・・」

間（短め）

キョウカ （急に）「・・・返してよ・・・」

テツヤ 「ん？」

キョウカ 「私はない子がいないと・・・ねえ、返してよ！」

ユキ 「え、私？」

キョウカ （ユキに飛びかかるようにして）「あなたしかいないじゃない！どう考えても！」

ユキ 「ちよっと、離して・・・」

キョウカ 「ねえ、返してよ！」

テツヤ 「キョウちゃん落ち着いて！」（引き離そうとする）

キョウカ 「ねえ、どこにやったの！？ねえ！」

アオ （牛乳片手に急いで帰ってきて）「ちよっと、なに？」

テツヤ 「ちよっと手伝って！」

アオ 「ああ」（牛乳をどこに置くか少し迷ってこたつの上に置き、テツヤに加勢しようとする）

キョウカ 「返してよ！」

ユキ 「離してって！」

テツヤ 「やめなっ！」

アオの置いた牛乳はその瞬間、振動によって倒れてこぼれる。キョウカとユキの無様な揉み合い。それを引き離そうとするテツヤ。どうすればいいのかわからず、ドギマギするアオ。3人の声だけが空虚に響き渡る。

やがて、テツヤがキョウカを抱きしめるようにして、二人を引き離す。3人も息が上がっている。沈黙の間。フクロウの鳴き声。

キョウカ （こたつの上のジャンプに手を伸ばそうとする）

テツヤ （その手を掴んで）「ダメだよ」

間

キョウカ 「・・・返してよ」

テツヤ 「落ち着いて」

キョウカ 「・・・返して・・・」

間

ユキ 「ほんとにわかんないから」

テツヤ 「え？」

ユキ 「・・・私、ほんとに知らないの！そんなキョウちゃんの子供が何してたとか、ほんとに知らないから私！」

キョウカ 「じゃあ何してたの！？」

ユキ 「少しアオのことを気にしながら」「・・・セクハラ、セクハラされてました！」

キョウカ 「は？」

アオ 「(同時に)「セクハラ？」」

引き戸が開き、ケイタが入ってくる。

キョウカ 「あ」

テツヤ 「あ、おはようございます」

ケイタ 「おはようございます(笑) おはようですか？」

テツヤ 「や、だって寝てたって」

ケイタ 「ああ、あんま寝れなかったんですよ。なんか凄いことになってますね・・・(笑)」

アオ 「ああ。(テツヤに)ちよっとタオル」

テツヤ 「ああ」(台所へ)

ケイタ 「いや、なんか寝れなくて、っていうかちよっと寝たらすぐ起きちゃって。それからYouTubeでお笑い見てたんですけど。ちよっと喉乾いちゃって・・・(笑)」

ユキ 「・・・この人です」

アオ 「は？」

テツヤ 「(同時に)(拭きながら)「え、どうゆこと？」

ユキ 「この人にセクハラされました」

テツヤ 「は？」

間

ケイタ 「は？どうゆう状況ですかコレ。え、何セクハラ？」

ユキ 「・・・セクハラ」

テツヤ 「え、この人が？」

ユキ 「はい」

テツヤ 「え、どうゆうことだ、コレは？」

ケイタ 「え、何言ってるの？それ」

アオ 「は、セクハラしたんすか？」

ユキ 「うん、した」

ケイタ (ほぼ同時に) 「いやしてないしてない！なんの話っすか？俺今起きてきたんすよ？いつの話っすか？」

テツヤ 「俺らが外行ってた時ですよ。サツキさん連れて。え、携帯取りに帰って何してたんですか？」

ケイタ 「何って、何もしてないですよ。ただスマホ取って、それでなんか急に眠くなったから寝ようと思って」

テツヤ 「や、でも・・・」

ユキ (ドンッと強く自分のスマホをコタツに置く) 「コレ」

ケイタ 「え、なに？」

ユキがスマホを操作してボイスメモが流す。斜体はスマホから。

ケイタ 「あのを、モテるでしょユキちゃん」

ユキ 「そんなことないですけど」

ケイタ 「や、嘘だ。ありえないよ。モテるよ」

ユキ 「ほんとに。全くモテないですよ」

ケイタ 「えー信じられないな」

ケイタ 「ねえ、なにこれ！」

アオ 「しっ！」

キョウカ (フラーッと出て行く)

テツヤ 「あ、キョウちゃん」

ケイタ 「キョウちゃん、コレは・・・！」

キョウカ (無視)

ケイタ 「ほんとに肌、キメがもう・・・」

ユキ 「ちょっと触らななな！」

ケイタ 「え」

ユキ 「触らないでくださいよ！」

ケイタ 「いや、触ってないよ。ふれただけで」

ユキ 「どうゆうこと」

ケイタ 「や、だから別に今ほっぺを触った、触ったっていうか手がふれたのは、その、だから故意じゃなくて」

ユキ 「故意じゃない？」

ケイタ 「故意じゃなくて、恋。なーんちゃって」

ユキ 「何言って・ねえだから触らないでって！」

ケイタ 「だから触ってるって言わないよコレは」

ユキ 「でも今のは胸・・・」

ケイタ 「胸？や、今触ったのはお腹でしょ」

アオがスマホを取って消す。ユキに押し付けるように渡す。

アオ 「なんすかこれ？」

ケイタ 「・・・」

アオ 「なんすかこれ！？」

テツヤ 「ちよっとアオくん落ち着いて」

アオ 「いや、落ち着けるわけないだろ！・・・そんないや、え、だって、え、（ユキに）なにこれ？」

ユキ 「だから、この人が」

アオ 「うん」

ユキ 「この人がなんか、すごい触ってきて。胸とか」

ケイタ 「だからお腹・・・」

アオ 「どうでもいいんだよそんなの！・・・お、お前なんなんだよ！！」

ケイタ 「・・・」

間

テツヤ 「・・・あのキョウちゃんと婚約してるんですよね？」

ケイタ 「ええ」

テツヤ 「ごめんなさい、今パニックなんですけど、どうゆうことですか？」

ケイタ 「・・・」

テツヤ 「婚約してて、浮気しようとしてたってことですか？」

ケイタ 「・・・」

テツヤ 「ちょっと早くないですか？」

ケイタ 「早い？」

テツヤ 「ちょっと早いですよね・・・？」

間

アオ 「テツちゃんさ、ちょっとどっか行ってて」

テツヤ 「え？」

アオ 「なんかテツちゃんいると、話こんがらがるわ・・・」

テツヤ 「あ、ごめん・・・」(行こうとしない)

アオ (激昂して)「だから早くいけて！」

テツヤ 「え・・・」

沈黙の間。  
フクロウの声。

アオ 「何なの、なんなんすかあんた、ほんと何しに・・・？」

ケイタ (大きく深呼吸をする)

アオ 「・・・なに？」

ケイタ 「・・・あの・・・あのこんなこと言うのもなんかよくないってわかってるんですけど・・・あの本当は、あの、本当はどうか実は、そんなに好きじゃなくて、好きっていうので婚約してなくて、キョウちゃんと」

テツヤ 「え？」

ケイタ 「好きじゃないっていうのは語弊があるんですけど、でもそろそろ結婚しろってうるさいんで、周りも、親とか。だから婚約したっていうのはもちろんあります」

テツヤ 「ああ」

ケイタ 「いや、俺婚約した時すでにキョウちゃん妊娠してたんで、だからそのそーゆーことしてないんすよ彼女と」

テツヤ 「そーゆーこと？」

ケイタ 「そーゆーことですよ」

テツヤ 「え、何それ？」

ケイタ 「セックスだよ！わかれよ！」

間

アオ 「ねえ、ほんと出てって」

テツヤ 「・・・ごめん」(トボトボと出て行く)

間

ケイタ 「・・・だから、その性欲というか、その性の向け方とかもわかんないじゃないですか」

アオ 「・・・」

ケイタ 「俺、童貞なんすよ」

アオ 「・・・いやだからって」

ケイタ 「だから、それでユキさんが可愛かったからっていう、そうゆう、アレで・・・」

アオ 「・・・いやでも・・・」

ケイタ 「あの、本当にすみませんでした！」(土下座する)

アオ 「・・・」

ケイタ 「ユキさんも。すいませんでした！」

ユキ 「・・・」

キョウカが台所からフラッと入ってくる。部屋の端で立っている。

ケイタ (気づかず)「・・・子供のことも全然可愛いと思ったし、俺がしっかり育てようとか思ったんですけど、っていうか大丈夫ってことを伝えるために今日来たんですけど。でもなんかやっぱり自分の子じゃないって、今日見てどう気持ちを整理したらいいかわかんなくなっちゃって・・・」

アオ (遮って)「え、でも育てるんですよね？」

ケイタ 「いやだから」

アオ 「子供。そう言ったじゃないですか、さっき」

ケイタ 「え？」

アオ 「ええ。言ってたから、あなた」

ケイタ 「や、だから、もうなんか、そうゆうのが・・・」

アオ 「え、でもだって結婚はするんだよね？」

ケイタ 「や・・・まあ・・・あ」

キョウカ (遮って)「・・・え、じゃあ、いいんだよね？」

他 (キヨウカの方を向く)「!?!」

キヨウカ 「じゃあ、もうケイちゃんはこのことには関わらないってことでいいんだよね？」

ケイタ 「え、なんで？」

キヨウカ 「なんでって。関係ないから。私のこと好きじゃないって言ったよね？聞こえてたから」

ケイタ 「え、聞いてたの？」

キヨウカ 「うん」

ケイタ 「なんで？」

キヨウカ 「私、ポテチ食べてたから、そっちで」

ケイタ 「・・・あ、そう・・・」

キヨウカ 「はい。もうケイちゃんは関係ないです」

アオ 「いや、でも婚約は」

キヨウカ 「破棄破棄、破棄でしょそんなの。そもそも浮気されたんだから」

ケイタ 「ああ・・・」

キヨウカ 「ケイちゃんが悪いんだから」

アオ 「・・・え、でも子供は？この人が育てるって」

キヨウカ 「や、だからそれもナシでしょ」

アオ 「じゃあどうするの？」

キヨウカ 「それは、私とその子の父親と一緒に育てます」

問

ユキ 「え、そもそも、子供は？」

キヨウカ 「あなたに関係ないでしょ」

ユキ 「え、でも私それでさっき胸ぐら掴まれてますから！」

キヨウカ 「ああ、それはすみませんでした！」

問

アオ 「・・・いやでも、この人と子供育てるって」

キヨウカ 「だからそれは無くなったの今」

アオ 「それは困るでしょ」

キヨウカ 「なんで？」

アオ 「いや、だって・・・」

キヨウカ 「私は、この子の父親と結婚して、一緒に育てるって決めたの。っ

ていうか最初からそうしたかったんだから」

アオ 「・・・無理でしょ」  
キョウカ 「無理じゃない」  
アオ 「・・・いいから、この人と一緒になれって」  
キョウカ 「無理だからそれは」  
アオ 「この人と結婚しろよ」  
キョウカ 「なんで？」  
アオ 「いいから」  
キョウカ 「なんで!？」

廊下側の引き戸が開く。サヤがいる。コップを持っている。

アオ 「あ」  
サヤ 「・・・あの、その、私その犯人じゃないですよ？」  
アオ 「え？」  
サヤ 「あ、なんか私疑われてるって言われたから」  
アオ 「ああ」  
サヤ 「なんか起きたら枕元にあの男の人いて、マジ一瞬ビビりましたもん。やべえ、またやらかしたって思って(笑) したら、疑われてるよって言われて・・・(笑)」

ケイタ (ササッと出て行く)

サヤ 「・・・え、なんか揉めました？」  
アオ 「いや」  
サヤ 「ならいいんですけど」(牛乳のこぼれた跡を踏んで)「冷た!なんすかこれ」

アオ 「あ、さっき牛乳こぼれちゃって」  
サヤ 「・・・やっぱなんか揉めてたんじゃないですか(笑)」  
アオ 「・・・ほんとなんでもないよ(笑)」

間

サヤ 「・・・なんか変に冷えますね」(コタツに座る)  
アオ 「・・・」  
サヤ 「・・・あとずっと言いたかったんですけど、変な匂いしますよね、この家・・・」

キョウカ (突然に泣き出す)

他 「？」

キヨウカ 「・・・」(泣いている)

サヤ 「え、どうしたんですか？」

アオ (苛立って)「え、なに？」

キヨウカ 「・・・なんで。なんでさ、ユキちゃんのためには怒るのに私のためには何もないの」

アオ 「は・・・？」

キヨウカ 「ユキちゃんがセクハラされたら、あんなに怒るのに」

アオ 「ちよつとキヨウカ何言ってるの？」

サヤ 「え、何？セクハラ？」

アオ 「や、なんか婚約者にされたみたいで」

サヤ 「誰が？」

ユキ 「あ、私」

サヤ 「あ、え、あー・・・へえ・・・(笑)」

キヨウカ 「ねえ、なんで？」

アオ 「・・・それはさ、だってユキが被害者だから」

キヨウカ 「被害者？」

アオ 「うん、セクハラ被害者。だから怒るのは普通でしょ？」

キヨウカ 「そう？」

アオ 「うん」

キヨウカ 「私がセクハラされたら同じように怒った？」

ユキ 「は？え、なに・・・」

キヨウカ 「ちよつと黙ってて！」

アオ (ユキを気にしながら)「・・・うん、怒る怒る」

ユキ 「え」

キヨウカ 「・・・じゃあさ、私がストーカーされたらその相手殺す？」

サヤ 「え、殺す？」

アオ 「・・・お前そんなこと・・・」

キヨウカ 「答えてよ！」

アオ 「そんなこといいだろ今！」

キヨウカ 「・・・」

間

アオ (ため息をついて)「・・・うん、殺す。殺すよ」

キヨウカ 「あ、良かった……」  
サヤ 「え、どうゆうこと……？」  
キヨウカ 「……私のこと好き？」  
サヤ 「おいおい」  
ユキ (同時に) 「はい？」  
アオ 「お前マジで……」  
キヨウカ 「好きだよね？私のこと……」  
ユキ 「……何言ってるの!？」  
キヨウカ 「ねえ、お兄ちゃん？」

上から、叫び声と床をドンドン叩く音。全員が上を向く。

ユキ 「アオ？」  
アオ (上を向いたまま) 「ん？」  
ユキ 「キヨウちゃんの子供ってさ」  
アオ 「また母さんなんか、やってる……」  
ユキ 「子供ってやっぱりさ！」  
アオ 「……もう勘弁してくれよ」(立つ)  
ユキ 「ねえ、アオ！」  
アオ (激昂して) 「ほんと勘弁してくれよ！」  
ユキ 「……ねえ聞いて!？」  
アオ (大きくため息をついて出て行く)  
ユキ 「アオ！」

沈黙の間。フクロウの鳴く声。

ユキ (ゆっくりキヨウカの方を見る)  
キヨウカ (見つめ返す)  
サヤ (落ちている人形を拾って) 「……あ、コレが」(おもむろにスマホを出し写真を撮る) 「かわいそう……ほんと」(スマホを充電器に挿す)

間

サヤ 「……やっぱり、満月は人を狂わせるんですよ」

キヨウカ 「・・・満月関係ないよ」

サヤ 「え・・・？」

キヨウカ 「今に始まった事じゃないから」

サヤ 「どうゆうことですか？」

キヨウカ 「・・・この家は異常なのかもしれない」

サヤ 「？」

キヨウカ 「なんかさつきみんな月見に行つて、テツちゃんとかタクミくんとか綺麗つて言つてたんすけど、私全然綺麗に見えなくてボヤーつてしてるようにしか見えなくて」

サヤ 「はい」

キヨウカ 「そしたら、お兄ちゃんも同じように思つてたらしくて、だから、

多分この家は異常なんだよね」

サヤ 「・・・異常つて自覚はあつたんですね（笑）」

キヨウカ 「（苦笑）」

アオ （声だけ）（声を荒げて）「ねえ、母さんまた・・・ちょっとねえ！」

タクミ （上を気にしながら入つてきて）「・・・あのさ、正露丸ある？」

キヨウカ 「・・・正露丸？」

タクミ 「なんかお腹痛くなつちやつて」

キヨウカ 「あ、ちよつと待つて」（棚の中を探し出す）

タクミ 「なんかそんなトイレ行きたかつたわけじゃないんだけどさ、便器座つたら痛くなつちやつて」

サヤ 「あ、そうゆうときある」

タクミ 「・・・あのさ、キヨウちゃんごめんさつき。だからその、無神経なこと言つて」

キヨウカ 「あ、や、なんかこつちもなんか・・・（笑）はいこれ」（正露丸を手渡す）

タクミ 「ありがとう。あ、水・・・」

サヤ 「コレ、飲みます？」

タクミ 「あ、え、あ、でもいいんですか？」

サヤ 「？」

タクミ 「間接キスとか・・・」

サヤ 「あ・・・あ、別に・・・」

タクミ 「じゃあ遠慮なく。(ラベルを読んで) 4つね」(4粒取り出して、飲む)

サヤ (飲んでいる喉仏あたりをじっと見つめている)

タクミ 「ありがと」(コップをこたつの上に置く)

間

タクミ 「正露丸のセイってき、元々征服のセイで、ロシアを征服するって意味だったって知ってる？」

サヤ 「なんですかそれ？」

タクミ 「アレだよ、戦争の時、昔の。ロシア敵だったから」

サヤ 「へえ」

タクミ 「すげー物騒だよね(笑)」

サヤ 「(笑)」

タクミ (こたつに座ろうとする)

キョウカ 「お腹はいいの？」

タクミ 「うん、今波引いてきたから」

キョウカ 「そう」

間。上からアオの怒鳴り声。

タクミ (何かを思い出したように) 「そうだ、トイレットペーパーってどこ？」

キョウカ 「あれ？切れてた？」

タクミ 「拭こうと思ったらアレねえ！ってなって(笑)」

キョウカ 「あ、それは(笑)」

タクミ 「カレンダーさ、先月のままだったから、それやぶってケツ拭いた

わ(笑)」

キョウカ 「全然いいよ(笑)」

血相変えたケイタが勢いよく引き戸を開ける。その後ろにテツヤ。

ケイタ 「ねえ、何アレ!？」

他 「!？」

ケイタ 「ねえ、何アレ!？」

タクミ 「アレ？」

ケイタ 「うん、あ、だから、あっちの、あっちの部屋」

タクミ 「？」

テツヤ 「えっと、畳のさ、部屋行ったんだけど。あっちの」

タクミ 「・・・え」

キョウカ (同時に) 「・・・あ」

ケイタ 「なんか、扉開けたら、変な、やばくて・・・ねえ？」

テツヤ 「うん。なんかすごい匂いがして、ウンチというか、そうゆう排泄物？そうゆうの匂い」

ケイタ 「扉を開けたら、モワァってなんだろう、畑のさ、牛糞の匂いをやばくしたみたいな匂いがして」

タクミ 「・・・ああ」

ケイタ 「それで電気つけたら・・・」

キョウカ (遮って) 「電気つけたの!？」

ケイタ 「うん、だって異常な匂いだったから。そしたら、なんかなんか、もう・・・」

サヤ 「え、何があったんですか？」

ケイタ 「だからその・・・」

テツヤ 「なんか、何があったというか、なんか異常な感じで、とにかく臭いし、ウンチとか多分おしっこの跡？みたいなのもあって・・・あと血痕とか」

サヤ 「血痕!？」

テツヤ 「うん・・・ウンチもベチャァって、床に・・・」

上から今までで聞いたことないような大きなアオの声で、「勘弁してくれよ!!」と聞こえる。全員がビクッとして黙る。

ケイタ (呟くように) 「・・・え、何を隠してるのこの家は？」

キョウカ 「え？」

ケイタ 「なんかあるでしょ、絶対・・・!」

キョウカ 「・・・」

上から今までで一番大きな声で「お前さ！ババアなんだから！もう歳だろ！若い女じゃないんだから！！男に振られたぐらいで何回も自殺なんてしてんじゃねえよ！！！」という怒鳴り声が聞こえる。沈黙が訪れる。  
しばらくの沈黙。引き戸が開く。アオが、中に子供が入っているタオルケットの塊を持って立っている。

アオ 「・・・あ、ただいま」

タクミ 「・・・おかえり」

アオ 「あ、コレ」

タクミ 「え？」

アオ 「・・・コレ、赤ちゃん、いたわ・・・」

タクミ 「あ、え」

沈黙の間。全員がアオを見た後、キョウカを見る。キョウカはフツと微笑む。  
アオはちよつとしてから、それをゆりかごに入れる。

サヤ 「え、どこに？」

アオ 「え？」

サヤ 「どこにいたんですか？その子」

アオ 「なんか寝てた。ばあちゃんの部屋で」

サヤ 「はい？」

アオ 「ばあちゃんの部屋、2階の。ばあちゃんの隣でなんか猫みたいに寝てたわ」

サヤ 「あっ・・・そうだったんですね」

アオ (キョウカに) 「なんかね、むかしのタマコとばあちゃん見てるみたいだったよ」

キョウカ 「(笑)」

間

アオ 「テツちゃん」

テツヤ 「ん？」

アオ 「多分ばあちゃんウンコ漏らしてる。もう匂いが」

テツヤ 「え、マジ？」

アオ 「ちよつと2階見てきて。ウンコもう凄い匂いだから」

テツヤ 「え、でも・・・」

アオ 「いやテツちゃんしかそうゆうことできないのよ。ってゆうーかそうゆう時のためにテツちゃんいるんだから」

テツヤ 「・・・わかったよ」(出て行く)

間

ユキ 「・・・若い女だったらいいの？」

他 「？」

ユキ 「アオ。若い女だったら浮気されて自殺していいの？」

アオ 「は？」

ユキは急に自分の手首を切るために、こたつの上のジャンプから包丁を抜き出す。ユキが手首を切るギリギリのタイミングで、タクミがユキの手首を掴む。それをユキは振り払おうとする。

ユキ 「離して！離して！」

タクミ 「ユキちゃんどうしたの！？」

ユキ 「死なせて！ねえ、死なせてよ！」

タクミ 「ちよっと！包丁離してよ！ねえ、ちよっとアオ！」

アオ 「ああ」(ユキを後ろから羽交い締めにしようとする)

ユキ 「死ぬの！離してよ！」

タクミ 「ダメだって！どうしたんだよ！」

ユキ 「死にたいの！死なせてよ！」

アオとタクミがユキを止めようとする。ユキは泣きながら暴れる。他の人たちはどうしていいか分からず、見ている。少しして、攻防の中、タクミが包丁を奪う。ユキは抵抗をやめる。ユキ、アオ、タクミは息が上がっている。

ユキ (ハアハア)「・・・死なせてよ・・・」

タクミ (ハアハア)「・・・ユキちゃん、ほんとどうしたの？」

ユキ 「・・・」

間

ケイタ (呟くように)「・・・もう意味わかんねえよ・・・」

間

ケイタ (激昂して) 「ほんとなんだよこの家！」

キヨウカ 「うるせえよ！」

ケイタ 「・・・」

沈黙の間。フクロウの声。

タクミ (呟くように) 「・・・この包丁すげえ錆びてる・・・こんなんじゃ

切れないよ・・・」

間

ユキ (おもむろにスマホを出し電話をかけようとする)

タクミ 「ユキちゃん？」

ユキ 「・・・もしもし、警察ですか？」

タクミ 「警察！？」

ユキ 「警察ですよね？あの、人殺しました。人。殺人」

他 「！？」

タクミ 「ユキちゃん！」

アオ (同時) 「ユキ？」

ユキ 「私が。や、私たちが殺しました、みんな。場所？場所はえつと、山城家。山城家、あの、川の向かいのわかりますよね？わかるじゃないですか。警察なんだから。警察なんだから絶対わかるでしょ。警察ってだって。だって」

タクミ 「ねえ！」(携帯を奪って、切る)

間。タクミがみんなの視線を受ける。

タクミ 「・・・ねえ、何やってるの！？」

ケイタ 「え、殺人ってなに？」

タクミ 「・・・だから」

ケイタ 「殺人って何だよ！」

間

ユキ 「・・・アオとか私たちが人殺したんです。昨日の夜」

ケイタ 「・・・はい？」

ユキ 「・・・駐車場にあるアオの車。そのトランク、死体入ってるんで。見てきたらいいんじゃないですか？」

ケイタ 「殺人って・・・それ、ほんと？」

キヨウカ 「ほんとだよ」

ケイタ 「え・・・」

キヨウカ 「・・・サヤちゃんのお父さん」

サヤ 「え、私？」

キヨウカ 「うん」

サヤ 「お父さん？」

キヨウカ 「そうだよ」

サヤ 「私の・・・？」

キヨウカ 「うん」

サヤ 「ああ」

間

サヤ (急に立って出て行く)

ケイタ 「あ、俺も」(後に続いて出て行く)

間

タクミ (呟くように)「・・・なんで全部・・・」

キヨウカ 「どうせすぐバレたことでしょ」

タクミ 「でも明日まで耐えれば・・・」

キヨウカ 「無理に決まってるじゃない。馬鹿じゃないの？」

タクミ 「ああ・・・」

沈黙の間。フクロウの鳴き声が響き渡る。

しばらくして、キヨウカがアオにすり寄ってそのままキスをする。

アオ 「・・・ちよっと」

キヨウカ (勝ち誇った表情でユキを見る)

間

ユキ 「・・・帰る」(傍に落ちていた自分のスマホを拾って、ゆりかごの

中を一瞥してから、足速に出て行く)

アオ 「ちよっとユキ」

間。ユキが出て行った方を見ているアオに、キョウカはもう一度キスをする。それに対して意味がわからず、ただ呆然と眺めているタクミ。

アオ (誤魔化すように)「・・・ごめん、母さんの様子見てくるわ」(立つ)

キョウカ 「あ、私も」

アオ 「いいよ、キョウカは」

キョウカ 「・・・」

アオ 「いいよ、来なくて」

キョウカ 「・・・」

アオ 「じゃあ」(出て行く)

間

キョウカ 「好きなの」

タクミ 「え？」

キョウカ 「どんな風になっても、好きなの」

タクミ 「・・・そうなんだ」

キョウカ 「多分今後もずっと・・・」(立って出て行く)

一人取り残されるタクミ。大きな深呼吸。頭を抱える。それからもう一度大きく深呼吸する。時折「ああ・・・」「はあ・・・」と言った声が漏れる。タクミの呼吸が部屋に充滿する。フクロウの鳴き声が遠くで聞こえる。

サヤが入ってくる。タクミはそれに気づかない。充電器からスマホを取る。出て行こうとして立ち止まる。

サヤ 「・・・あの」

タクミ (振り返る)

サヤ 「・・・彼女さんと別れたんですよね？」

タクミ 「え？」

サヤ 「や、聞いたんですけど」

タクミ 「・・・うん」

間

サヤ 「今見てきました。父親」

タクミ 「・・・ああ」

サヤ 「なんかすごい顔してて、すごい顔してましたよね？」

タクミ 「そう・・・だったかな」

サヤ 「だからコレ、撮ろうと思って」

タクミ 「・・・お父さん嫌いななの？」

サヤ 「・・・どっちでもないですかね」

タクミ 「え？」

サヤ 「普通です」

タクミ 「そう・・・」

問

サヤ 「・・・あの、私とませんか？」

タクミ 「え？」

サヤ 「なんかお父さんのすごい顔見てたら、なんか性欲湧いてきちゃって・・・」

タクミ 「はあ・・・」

サヤ 「・・・あなたのこと、結構タイプなんで」(上の服を脱ぎ、ブラジャー姿になる)

タクミ 「ちよっと・・・」

この時、廊下の向こうからテツヤの声。

テツヤ (声)「ねえ、キョウちゃん!?!なんかトイレ詰まって、水溢れちゃってるけど!水びだしだよトイレ!結構やばい感じだけど。なんかウンチとか、うん、水がもう・・・」(引き戸を開ける)

ブラジャー姿のサヤを一目見て、「あっ」とつぶやいた後、引き戸を閉める。

サヤ 「触って」(タツヤの手を握って自分の胸に置く)

タクミ 「・・・」

サヤ 「脱いで」

タクミ 「・・・え」

サヤ 「私も脱ぐから・・・」

タクミは少し迷い、ドギマギする。しかし、サヤと見つめあっているうちに、落ち着きを取り戻し、吹っ切れたように上半身から脱ぐ出す。上半身を脱ぎ出したら、舞台は溶暗していく。

以降は二人の吐息や、微かな声が聞こえるだけ。

二人が盛り上がってきたあたりから、遠くからパトカーの音が聞こえてくる。そしてそのパトカーの音はドンドン大きくなり、最終的に、二人の喘ぎ声をかき消して行く・・・

完